

Into my Packet



後藤滋樹の

新・社会楽

後藤滋樹
goto@goto.info.waseda.ac.jp
早稲田大学 理工学部 情報学科

第58回「フルタイム vs. パートタイム」

【フルタイムで働く】

私はNTT、つまり昔の電電公社の研究所に勤務した経験がある。その頃の就業規則の最初のほうに「職員は全力を挙げて職務の遂行に努めなければならない」という主旨の文章があった。新入社員であった私は、この文に感心すると同時に恐ろしいと感じた。仕事をサボったら規則に違反するという意味なのか？ 研究室の先輩に規則の解釈を尋ねると、「あれはアルバイト（副業）を禁止する規定だ」と言う。それを聞いて少し安心した。

このような古い話を持ち出したのは、全力を挙げるのが意外に難しいと思うからだ。例を2つ示そう。

米国にインターネット2というプロジェクトがある。その説明は  www.internet2.edu に詳しく載っている。edu というドメイン名でわかるように、大学の連合体である。インターネット2の発足時には、関連する大学の先生方が委員会を構成して推進していた。そのあとにUCAID（University Corporation for Advanced Internet Development）という組織が設立された。小さい組織であるが立派にCEOがいる。私はインターネット2と文書を取り交わすために交渉したことがある。相手はUCAIDのマネージャーである。つまり向こうはUCAIDのフルタイムのスタッフ。こちらは委員会のようなもので、私を含めて全員が言わばパートタイムである。相手のマネージャーは電子メールに迅速に応答してくる。こちらはいろいろな仕事と掛け持ちで苦しい。

2番目の例。インターネットのドメイン名、IPアドレス、プロトコル標準などを管理する組織として以前はIANAがあった。現在は新しいICANNという体制に移行しつつある。このICANNはロサンゼルスで登記された米国の非営利法人である。

そのCEOのマイク・ロバーツはEDUCOMという団体の代表を長年にわたって務めた人物だ。彼は上のインターネット2の提唱者としても有名である。私はマイクに質問した「インターネット2の活動が盛況だし、ICANNは米国内でも国際的にも議論百出だ。忙しい仕事を2つも引き受けて大変でしょう。彼は答えていわく「いや、インターネット2はもう後任に任せた。今はICANNに専念している。2つの仕事はできないよ。これはフルタイム宣言と言える。これに対してICANNに関係している日本人の中にフルタイムは誰もいない」。

【日本はパートタイム】

日米の競争力を比較するなかで、日本にはベンチャービジネス

が少ないという指摘がある。私の観測では、ビジネスだけでなく、産官学のいずれにおいても新しい組織を作るのが難しい。

産業界では新しい会社（ベンチャー）が少ないだけでなく、既存の会社の中で新しい部署を作るのも大変だ。お役所でも新しい組織はめったにできない。米国政府では情報通信分野の組織が次々に誕生する。なかには名称を変更しただけの新組織や開店休業状態のオフィスもあるようだが、それも次の機会には整理される。

大学でも新しい学科を創設するのは苦勞する。授業科目だって長年にわたって維持するのが前提になっている。このような緩慢な変化は農業立国には適していたのかもしれないが、情報産業を中心とするならば、もっと迅速に動きたい。

結局、日本では新しい仕事でも既存の組織が担当する。会社で言えば、米国のベンチャーに対抗するのは日本の大企業の既存の部門である。米国政府の新組織に対応するのは既存のお役所。大学の新しい授業科目は、既存の学科のどこかに潜り込むことになる。

ここで問題なのがパートタイム、つまり掛け持ちである。既存の組織は従来の仕事を分担している。それに加えて新規の仕事を受け持つ。スタッフは新しい仕事に全力投球できない。



【失敗を分担する】

日本の現状を評して「既得権が強すぎる」という指摘がある。これは上の指摘と同じ意味だと思う。日本人はリスクを嫌うという説もある。私は日本人の完璧主義が冒険を阻害していると思う。

新規の事業にはリスクが伴う。問題は誰がリスクを背負うかだ。ここで個人と社会との関係が問われる。リスクを個人に負担させるのは合理的なように見えるが、実は過酷である。米国では個人が進んでリスクを負担しているように見えるかもしれないが、私の観測は違う。米国では社会がリスクを負担している。つまり個人は失敗しても構わない。失敗しても社会の中で立派に役割を果たせる。そのための仕組みが社会に備わっている。

フルタイムで新組織のために働いても、組織の将来が保障されるわけではない。個人的な損得計算をすれば不安材料がいっぱいだ。しかしその仕事は全力を挙げて取り組む価値がある。UCAIDもICANNも、社会が必要としている仕事なのだ。それが成功すればもちろん素晴らしい。だが万一失敗したとしても、それはそれで社会的な分担を果たすことになる。このような仕組みが日本にも必要だと思う。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp